広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	トランスフォーメーションの獲得
Author(s)	葛西，琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 51 - 59
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045175
Right	
Relation	

特集 子どもにとっての時間と空間

トランスフォーメーションの獲得

葛西琢也

❶ 時空転換のイマジネーション

上原輝男先生は、イメージが我々人間を行動させる、我々のイメージが、我々の現実生活を誘導しているという人間理解に立ち、子どもの個性も、またその成長発達を捉える視座をもイメージ運動の中に見いだそうとしていた。その視座というべきものにトランスフォーメーションがある。時空転換のイマジネーションをこう呼んでいるのであるが、世界定めとも言っていて、子どもたちの命の発露をここに見ることができるのである。

上原先生は、最終講義においてトランスフォーメーションについて述べるに先立ち、二人の師匠に導かれたのだということを話された。先ず、郡司正勝先生のことばを引いて、

「郡司先生も最終講義で、やっぱりこういうことを話している。何を話されたかと言うと、『たつ』についてなのです。この日本人の立つ、たてるというこれは現実的な意識ではない、ということなのです。例を取ると中国伝来の『龍』を日本人は『タツ』と呼んできた感覚を考えてみることです。もっとも深いイメージの中で、深層心理の働くところでわれわれは立派な映像を創っているのだと言うことを最終講義として先生は述べられている。この慣習化が見立てであります。」

次に、折口信夫博士のことばを引いて、

「古代日本人の信仰生活には、時間、空間を超越する原理が備わっていた。」と、それをそうさせるのは呪詞であると言う考え方を折口先生はしておられる。いわゆる呪いの言葉。つまり祝詞です。掛けまくも畏きで始まる。それは時間、空間を転換させるのだということです。意識世界に連れ去っていってしまうということであります。またこんなふうに述べられているところがあります。「因明以前、つまり原因結果というような論理を思いつく以前の日本人は、或は教えられる以前の日本人の感情論理においては、後世までも時代地理錯誤の跡を残している。」こういうことを言っておられる。時代や地理を錯覚している。そういう跡を残している。その通りなのです。れれわれは時間を超越する能力を持っている。

この郡司、折口の二人の師匠の考えに導かれ、見つけたのがこのトランスフォーメーションという時空転換のイマジネーションであるということである。

先ず初めに、時空の転換とまではっきりとした形を示さないまでも、子どもたちの日常生活が、顕在世界と潜在世界を行き来するところに成り立っていることを、子どもたちの作文を資料として示したい。

「人はこれをうそと言うかもしれないが、私には本当のことだ。」と、板書し、さらに、「錯覚」「白昼夢」と書き加え、この三つ中から書き易い題目を選んで書くように子どもたちに指示した。作文の新しい試みということになるが、作文することによって、潜在意識世界と顕在意識世界との間に望ましい関係を築きつつこの人の世を渡っていく、その方向性を意識化することを課題としたものである。

（資料1）白昼夢　S・M

四年生・男子・平成六年度

ぼくは、二年生の今ごろ父母に、鉄道模型をねだったことがある。父と母にそうだんしたところ、なかなか話がまとまらず、しばらく考えることになった。

次の朝、新宿駅のホームにたって電車が来るかどうか右のほうを見た。するといつもは中央線が来るはずなのに、機関車が、黒い煙をはいて、ホームにきた。そして機関車が止まり、「シュッ」と音を立てて、白いもやのようなものを、下から出した。そこで機関車は消え、ぼくの前には、戸の開いた中央線があった。

学校について、着がえるとき、ぼくのくつしたには、白いほこりのようなものが付いていた。

夢にまで見るといえば、思いの強さ、深さを意味するわけだが、現実には電車であるのに蒸気機関車に見えてしまった、それほど鉄道模型が欲しかったと作者は言っているわけではない。電車の扉が開いたとき、この子は我に返ったと言うべきであろう。この当時、鉄道模型や電車は、この子をイメージ世界に拉致してしまう磁力を持っていたということである。それは、汽車の持つ走り抜けるイメージ、その通過感覚が子どもを刺激、触発するからであると考えられる。或は、電車はイメージ世界から現実世界に届いた一つの記号であるということもできるだろう。いずれにしても、ここで確認しておきたいことは、イマジネーションは不時突発事態へ人を連れ去るのだということである。常識的に言えば、思わぬところで場面転換するのが人間のイメージであると言えよう。

（資料2）錯覚　　H・N

四年生・男子・平成六年度

ぼくが三才の時、おじいちゃんが死んでから一年目の一周忌の夜、ぼくだけ外に少し出ていたら、目の前におじいちゃんがいたのです。何を言っていたのか、聞こえたみたいだったのが、この「元気でね。」の一言だった。

ぼくも、「うん。」と言った。そしたら、おじいちゃんが笑ったのです。

ぼくがこのことを錯覚だと思ったのは二日ぐらいたってからです。

三歳の子どもが、錯覚を理解できているとは思われない。イメージの誘導に従い行動しているのが三歳児であると考えられる。この晩のことを錯覚だったとしたのは後年になってからの合理化である。その二日ぐらい後に、この子が了解したのはあれは生身のおじいちゃんではなかったということであったと考えられる。では、この子に起こったことをどう理解してやればいいのだろうか。それは、この子は発動するイマジネーションと正対していたのだと言って間違いないだろう。つまり死んだはずのおじいちゃんに会って慌てふためくとか、驚くということがない。このように改めて言うまでもないことではあるが、これは、イマジネーションを人間の営みとして受け止めることができているということである。

ただ、人間とイマジネーションとの在り方から言えば、錯覚という合理化を許してしまったことはまずかったのだと思う。思い違いでも勘違いでもなく、イマジネーションが、つまり夢が、おじいさんに会わせてくれるのだという期待がこの子にあってよいのだと思う。言い換えるなら、イマジネーションがわれわれをこの現実世界から拉致していくことへの期待である。

先程に引き続き、最終講義からの引用である。この日の講義題目は「垣間見の世界」であった。トランスフォーメーションを日本人の本来持っていた感覚、想像力として説くことが最終的なお考えだったと思われる。

いつという時間の問題、どこでという空間の問題、誰がっていう人間の問題。こういうふうに我々は意識を分裂させてしまったということが過ちだったのではないでしょうか。おまけに今日、この時間、空間、人間をばらばらに扱ってしまう、しまいつつある。私たちはこれを統合する知恵を持っていたという話をしているつもりなのです。そこで気がつかなければならないのが、時の間、空の間、そしてこれを我々は今、個体として取り扱ってしまっているのが人の間。人間というのは、時間（じかん）空間（くうかん）人間（じんかん）ですよ。正しくは、ジンカンといわなければならない。

先程の（資料2）は、じかん、くうかん、じんかんの三つを統合することのできた良い例だと思ったのだが、いかがであろう。一周忌という特別な時間感覚が触発したトランスフォーメーションである。

H・N君は、この作文を書いた時点で、題名を「錯覚」とし、文中でも錯覚だと思ったと言っているのだから、おじいさんに会ったことを否定的に捉えているようにも思える。しかし、このようにこの夜のことを作文として書いたということは、忘れてしまってよいことだ、無視してしまってよいことだと考えていないということであろう。無視してしまうには、あまりに鮮明なイマジネーションの転換だったのであり、強烈だったということであろう。単に映像として鮮明であったということではなく、時空の出現としてあったということである。

再び最終講義に戻ると、上原先生は先の三つは、「これ、共通項をとってみると全部　ま　なのです。日本人は間がとりたいのです。」と話しておられる。これは、トランスフォーメーションとは日本人には忘れようと思っても忘れることのできない「間」の感覚の問題なのだということであると思う。

ぼつぼつ話をまとめなければなりませんけれども、このまとめるというのも単に総括するということではありません。つかまえた間をとめるということでなければならないと言うことであります。間をそこにとめる。留める。自分が見つけた時間、空間、そして人間、特殊に捉えられ

た意識的な、あるいは、普通の時間、空間を超越したところのイメージを、そこに定着させた時にまとめることができたといえるのではないかと思うのです。

さらに、かいま見るということに話は移っていく。

透かしてみたとき、ちらりと見える。これがかいまみであり、別次元が確定する。ほんの一瞬しか見えない。深層を見たというのもそれ。イメージとして残るというのがこれだというふうに思えるのです。ですから当然、時代錯誤は起きる、地理的錯誤が起きて、私はよかったのだと思うのです。むしろ地理的錯誤、時間的錯誤を起こさるためのものである、ともいうふうにすら考えていくことができるのではないかと思います。その好例と思われる子どもの詩を示したい。

（資料3）てつぼう　H・Y

三年生・女子・平成七年度

さか上りをした。
その時、
はじめて、
美しい銀河を見た。
いっしゅんのことだった。
さか上りをした。
その時、
はじめて、
空をこの足であるいた。
いっときのことだった。

トランスフォーメーションを説明するのに適切な例でないかと思う。「いっしゅんのことだった。」「いっときのことだった。」というのは技巧でも何でもない、トランスフォーメーションの時間的側面に意識の向いた、かいま見たことのこの子の実感であったと考えられる。

本人に尋ねてみたところ、鉄棒をしていた時に思いついたのではないという。こういうことがあるだろう、と思って作った詩だという。この子は、こうすればイマジネーションを動かし得るということを知っているのであり、それはイマジネーション触発の体感があるということに違いない。小さな子どもたちが、でんぐり返りや逆立ちが好きなのは、その瞬間世界が変わることを知っているからであると考えられる。

子どものイメージと行動、これは一体であって、イメージ世界の中で行動しているのが子どもであると考えられる。

❷ トランスフォーメーションの発動　世界定め

子どもたちの日常生活は、トランスフォーメーションと共にあるということ、その直感なり体感なりが子どもたちにあるということは、先の三例からも分かるように思う。次に取り上げたいことは、その直感がどう動いてどのように時空を転換させるか、つまり新しい時空をどうまとめあげるのかということである。

鴎鵜の佃の島にしばし居て
波より出でし月を見しかも

八代将軍吉宗の次男である。大岡信氏は、和歌と学問を愛し、歌論も多く、万葉集に学んで江戸歌人中一流の人だった、と「折々のうた」で紹介している。ここにあるのは、水面すれすれの小島で見る大海原の月の出である。視線の果てに昇っていく月が見える。ここに、バシュラールの言うイメージの動性を認めることができるように思う。昇行する想像力の方向性と動きを感じるということである。矢のイメージは速度と直行性を統合してわれわれに示すが、垂直に昇っていくイメージはわれわれに何を感じさせるのかということを考えなければならない。

次の川端茅舎の俳句にも同じような垂直の動性を認めることができるように思う。

蛙の目越えて漣又さざなみ

同じく、大岡氏は、「春のさざなみの中に蛙の目が。それを越えて次から次へさざなみが。無限なるものが有限なるものに時々刻々じかに接して、ここに『春』がある。」と注釈を付けている。有限なるものと無限なるものとの接触、言い換えれば次元の転換がこのとき起きている。茅舎の昇行するイメージが投影されているからである。

フランスの哲学者ガストン・バシュラールは、『空と夢』で想像的上昇が世界の次元を変え、世界を大きくすると考える。「詩的なイメージは、それがわれわれを軽やかにし、われわれを持ち上げ、われわれを高める度合いに応じて、人間精神の働きそのものなのだ。それはただひとつの関係軸、すなわち垂直軸をしかもたない。それは本質的に大気的なものである」という。その垂直軸に沿った人間精神の働きを、田安宗武の歌に川端茅舎の句に認めることができたと思ったのである。

こうして、事々しく歌やら句やら持ち出したのは、子どもたちの想像的上昇と比べてみる必要があると思ったからである。

（資料4）私の白昼夢　O・Y

四年生・女子・平成八年度

二年生のある日、お昼休みのことだった。私は、一方的にせめられる側で、もう少しで、相手の女子にやりこめられそうだった。私は相手の口汚い言葉に、そろそろあきてきた頃だった。その時、私は、教室にいた。

私はもう喧嘩のことなんて、とうに忘れていた。教室の窓から、二羽の鳩が見えたからだ。でも、私は、どこにでもいる灰色の鳩に気を取られていたわけではない。とてもめずらしい鳩だった。二羽のうち一羽はまだらで、もう一羽は、からすのように真っ黒だった。（でもカラスでないというのは、鳴き声で判断）とても仲がよさそうな鳩だなあ、夫婦の鳩なのかなぁ、

そんなことを思っていたら、鳩が飛び立つ様子だった。
待って、私は心の中で叫んだ。それに気が付いたのか、二羽の鳩は、いっせいにこちらを向き、私のことをやさしい目で見つめた。そして飛んでいった。私は後を追った。
そう、私は空を飛んだのだ！空から見た武蔵境の景色は、最高、と言いたいところだが、そうでもなかった……。
高いところから見ると、人なんてちっぽけだった。
そうだ、人間なんてちっぽけだ。鳥になりたい！……そんなことを思ったときだった。
ああ、私は落ちていく、やっぱり無理だ。人間は人間として生れて、人間として生きて、人間として死ななければならないのだ。私は間もなくしぬ、……
「あんた、聞いてんの！」私はびっくりして飛び上がった。そうだ、喧嘩の途中だったっけ、私は、喧嘩の途中だと言うのに、とてもいい気分だった。

持続する時の流れの中で、この子は特殊時間帯に入ったということである。
本田和子氏は子どもによって生きられる時間は、しばしば、「いま」という一点に凝縮されると指摘し、子どもの時間の特殊性を、バシュラールに倣って垂直に噴出した「詩的瞬間」と把えている。それは「必然的に複合的」であって「相反するものの調和的関係」であるという。しかし、私たちは同じくバシュラールに拠りつつも、イマジネーションの問題として、時間と空間と人間を考えようとする立場にいる。この問題は後で詳しく考えることになる。
想像的昇行がわれわれのイマジネーションとしてなかったなら、この子は鳩と一緒に飛び立つことはなかったはずである。そして、われわれの直感が、イマジネーションとして発動するのは、働きそれ自体として運動それ自体として感応するからである。子どもを拉致していくのは動性であって、上原先生はこの動性こそ命でないのかと、そこに生命燃焼の見られることを指摘している。バシュラールは次のようにも言っている。「飛んだり泳いだりしている鳥に夢想がふいに共感を覚えるのは、空中や水中の種々様々な鳥を見るからではない。飛行の運動が直ちに急激な抽象作用を、完璧な、成就された、全体的な力動的イメージを与えるからである。」（『空と夢』）と、さらに「そもそもイメージが力動的な意味で美しいからだ」とさえ言うのである。
バシュラール自身の言葉を借りて言うならば、飛行の運動が、あるいは想像的昇行が時空の転換をもたらすということである。大地から高く上昇しようとする運動と、それは現実から遠く離れようとする運動をも意味するが、それと共に、垂直の方向性が鳥瞰の視点を発動するのだと考えられる。視点が定まることは、この場合高さとの関係でなされ、そこに視界が限定される。おのずから一つの時間空間が設定されることになるので、これを「世界定め」と呼ぶのである。

③ トランスフォーメーションの適応 見立て

想像的上昇は私たちに鳥瞰の視点をもたらす。大地から離れることなくして、上空から地上を見下ろす視点、のぞきこむ視点を獲得することになる。そのとき既に時空の転換、トランスフォーメーションが発動しており「世界定め」が成立している。そして、この慣習化、あるいは適用を「見立て」と言ってきたのだと考える。例えば、心理療法としても用いられる箱庭、盆景、風水、水墨画、これらはみなこの鳥瞰の視点の意識的な適用であるから「見立て」であるということができよう。
私たちは、峠、山頂、岬などからの眺めのようにトランスフォーメーションを起こし易い場所があることを知っている。あるいはそのような特定の対象のいくつかを思い浮べることができるし、あるいはそのような特殊な時間帯のあることも知っている。このよう環境との関係の中で、その意識化、さらにはその慣習化がなされてきたのだと考える。中でも、星と人間は、トランスフォーメーションを起こす最も強い繋りで結ばれた関係にある。星座は、もともとばらばらに散らばっている星の間に特定の像を認めたということあるから、イマジネーションが働いたということとして理解できる。
上原先生は「天と地との呼応。比叡山は秘江（琵琶）に真相をうつす御山」と題して、比叡山延暦寺の地主神としての日吉神社の祭礼を検証し、この山王祭に日本人の命のあり方を見出している。山王七社のそれぞれは、琵琶湖を望む側の峯の山頂もしくは中腹に点在している。この山王七社の位置は、天上の北斗七星が琵琶湖に影を映し、その影像をまた地上に形どったと伝えると聞き、山王神が湖水入りする昔からの伝承に、体が震えるほどに興奮したという御自身の経験を述べている。これを知ればだれもが興奮するスケールの大きな時空転移であり、ここにも見立てが生きていたという思いがする。
この祭礼は三日にわたり山の宮から里の宮、里の宮から湖上へと展開する。ここで祭の具体的展開に触れる余裕はないが、「宇宙空間を転換させることと、個々の祭を集大成するというより、それぞれを連続させること、つまり個々の場面をモンタージュさせることによって、時間経過を与えてしまうこと」この二つを上原先生は山王まつりの原理と捉え、祭を祭り足らしめる骨格であり、筆法のように思われると見解を述べている。その宇宙空間の演出の見事さを、舞台演出監督がいるのではないかと思われるほどであるとも記している。こうして、先生の『日本人の心

をほどくかぶき十話』によって示したかったのは、山宮から里宮そして湖上へと展開するまつりとともにあるイマジネーションの時間性である。「空間と時間の接点、つまり経移経過推移変遷に私どもは感動するからである。」と先生は指摘している。この時間性が、「神を迎え、送る、うながす、うながされの、待つ期待と、会う喜びを演出している」と考えられるからである。そして、後で示すようにこの時間性を子どもたちのイマジネーションの中にも見出せたと思ったのである。

子どもたちのトランスフォーメーションを触発する方法として、鳥瞰の視点から描かれた絵や、この視点から撮影された写真を使って作文を書かせるものがある。「絵を見て作文を書く」と題していろいろ試みているが、今のところ俯瞰景に子どもたちはよく反応するように思う。ここに紹介するのは右に掲げたポスターを使った試みである。絵を見ることはその作者の設定した世界を見ることであるから、時間軸、空間軸の変更を、絵を見る者は迫られることになるのだと思う。

(資料5) 駅で見つけた小さな秘密　T・M

六年生・女子・平成七年度

駅の掲示板に「石本正素描展」と書かれたポスターが貼ってある。まだ夜が明けていないらしく、どこかひっそりした風景が描かれているポスターが。

そのポスターを一人の男が眺めている。私はそれをなにげなく見ていた。すると次の瞬間、信じられないような出来事がおきた。教会らしい建物の蔭から、太陽が恥ずかしそうにまんまるい頭をのぞかせたのである。しかも、どこか遠くで一番鶏のなく声がしてくる。私は思わず息をのんだ。しかし、男は別にびっくりした風もなく、さっきと変わらずじっとポスターを見つめているだけだった。もはやそこには絵はなかった。絵という窓の向こうでオレンジの太陽が街をてらしたその時、一面クリーム色だった景色に変化が起きた。空は雲一つなく晴れわたり街の家々も鮮やかに彩られ、氷から溶けたように、街が活気にあふれてきたのだ。赤いレンガの道にも人があふれだしてきた。男は、窓を開けると、窓わくに手をかけ満足そうに微笑んで景色を眺めていた。私は男の背後から首をのばした。それと同時に、電車がホームにすべりこんできた。

ハッと我に返ると男も窓もなくなっていた。ふっと振り返った私の目に飛び込んできたのは、「ぼくの身体見てよ」とでも言うように、身体をピンと張ったポスターの色鮮やかな絵だった。いい街だなぁとそう思った。

あとで、もう一度見てみたら、クリーム色のポスターで、しわもよっているポスターだった。こんどはだれに秘密をあげるのだろう。そこの柱の陰にいる故郷という名の男と二人で。

このポスターの絵は子どもたちを故郷という空間に連れ去る誘引性を持っているといえる。それは例えば一度も生れた家を離れたことがない子どもにも、懐かしいという情動を感じさせることを意味している。それは、経験に先立つ先験的意識世界に生きているのが子どもたちだからであると考えている。つまり、この絵によってゆすぶられた潜在意識世界からの投影をかいま見た、その時空は故郷であったということになる。故郷という世界定めがなされたと言うだけでなく、ここに見立てが成立しているとするのは、故郷という名の男が設定されているからである。この男は、駅のホームでポスターを見てトランスフォーメーションを起こしている。そして、この作文の作者の位置は、この男、つまり他者のトランスフォーメーションをかいま見ているということであり、故郷という名の男を演ずる役者にもあるいは演出家にも譬えられるからである。

(資料6) なつかしき街　H・S

六年生・男子・平成七年度

僕はヨーロッパのとある街に住んでいる十歳の少年です。僕の家の近くに大きな時計台があります。その時計台に上がると、広い広い海が見えるんです。人々も明るいし、見渡すかぎりが海。僕はこの街が大好きです。

―二年後―

僕はこの街と今日限りでお別れです。僕のお父さんの仕事の関係で、日本という国に行かなければなりません。さようなら、僕の大好きな街……

―三年後―

もう日本にも住み慣れて、僕も中学三年生になりました。

ある日、僕が学校から帰る途中で、東京にある大丸というデパートの前にポスターが出ているのに

気がつきました。それには何と僕の住んでいたあの街が出ていました。僕はビックリしました。「入場無料」と書いてありました。入ろう、僕はそう思って、大丸の中に入っていきました。

僕の街の絵がありました。僕はひどく感動しました。うれしかったのです。僕はその大丸の前にあったのと同じポスターを買いました。それを今でも持っています。十年すぎたいまでも大切に持っています。また今度、あの街へ行ってみたいなあと思います。僕の大好きなあの街に……

題名を「なつかしき街」と付けたのは、この作文の作者が懐かしいという感情をこの絵によって喚起されたからである。しかし、言うまでもなくそれは、時空転換のイマジネーションに伴っているわけであるから、潜在意識世界からの投影であると考えられる。

潜在意識世界からの投影は、この絵に描かれた街を、初めて見た街であってもその人固有の街として立ちのぼらせる。この立ち上ぼってきた世界に住んでいる十歳の少年にとって、この街は大好きな街である。作者H・S君はこのように世界定めをする。

さらに、この空間に時間が与えられる。二年後、三年後、十年後と、時間経過推移として全体構成が成される。すると、持続する時間経過の中にこの絵は位置付けられるので、そこに見立てを明確に認めることが出来るのである。同時に、この時間の推移に懐かしいという感情が伴うので、この少年を住まわせた世界はますますくっきりと立ちのぼってくることになる。ここに先に示した、山王祭に見られたのと同様のイマジネーションの時間性を認めることができると考える。つまり、故郷との別れの寂しさ、再会の喜び、驚き、懐かしさを演出するものとして。

④ トランスフォーメーションのつぼ

トランスフォーメーション即ち時空の転換を捉える基本姿勢として、既に見てきたようにそれは、潜在意識世界からの投影であると考えている。初めに述べた師説の「垣間見の世界」とは、この顕在世界からの視線によって瞬間的にのぞくことのできた、深層心理の時空ということも出来る。即ち、この世界の二重性を生きているのが子どもであるということであるし、同時にそれは、子どものイメージの時間性と空間性が、二重のものとしてあるということである。このような子どものイメージの時間性と空間性の在り方を、普通のことばで言えばそれは「つぼ」であると早くから上原先生は指摘していた。

壷を置くだけで、そこに内と外が設定される。一つの世界の存在を感じてしまうのだから、宇宙空間を設定する道具であるとも言える。同時に、中が膨らんでいてしかも上方に向かってつぼまっている。つぼまっている故にそこは時間空間の接点として位置を表わすことにもなる。おなじように人体のつぼは、皮膚という身体の外と内の境界壁上の、生命エネルギーである気の集中する位置を示している。これは、われわれの身体と壷とそして宇宙とがイメージとして互いに変換できるという考えが前提となっている。つまり、身体象徴として、この宇宙の一点に位置を感じ取ることができるのだから、イマジネーションの働きの一つとしてつぼがあるということである。意識の集中する場所である。このことを物語る好例かと思う、向田邦子が自身のこととしてこんな話を残している。アフリカのあるところに、直径一メートルほどの場所があって、少女のころから、そこへ行かなければならない思いを持っていたというのだ。実際に、そこに行ってみたのかどうかは分からない、ただ夢に引かれて移動行動する人間の姿がよく分かる話だと思う。幼稚園の教師、小学校の教師である私たちは、子どもたちのこのような直感に働きかけなければいけないのだとこれも先生のご指摘であった。

この二編の作文資料を元に考えて来て、次のような答えが見いだせたように思う。この絵というべきか、この街というべきか、ここを、故郷という人が安らぎを感じる世界を触発するところとして、あるいは懐かしいという感情を触発するところとして、認めたい。すなわち、子どもたちがトランスフォーメーションを起こす「つぼ」として定位することができると考える。

背中合わせにした人形を離す。とたんに、「さびしい」と園児は言ったという。背くとはこれこれの意味であると教えることではない。右のようにしたとき、どう反応し、どう反応しないかをよく見ることであるというのである。

以下に示す六編の作文資料は、「つぼ」か「壷」かどちらかのことばを提示されて書かれたものである。壷作文の効能がどの辺りにあるか見ていきたい。最初は教室に実際に壷を持ち込んで、中に何が入っているのか見通してほしいと指示して書かせたものである。

（資料7）つぼ　　N・Y
五年・男子・平成六年度

机のうえに壷がある。ふたを開けると地球がある。小さな物体が動いている。よおく見ると人間だと分かる。タシさんや小出宏之先生、今まで見てきた人達や動物がいる。

日本の武蔵野市の聖徳学園の旧校舎の二階を見た。しかし、僕たちはいない。

立川市の自分の家を見た。しかし、そこは自分の家ではない。もしかしたら…世田谷を見た。やはり、僕の昔住んでいたところに中野という表札があった。公園を見た。あ、すべり台からだれか落ちている。僕だ。確かに僕は小さ

いときころんだ。今でもそのキズはのこっている。
そう思って見ていると、だれも滑り台にはいなかった。あ、自転車をだれかにつかんでもらって乗っている子がいる。それも僕だ。胸が熱くなる。また、消えた。きつい坂を上って絵を習いに行っている、それも僕だ。
一つ消えては、新しい僕が出てくる。祖母の家に泊まってよろこぶ僕。兄とけんかしている僕。友達の家に行き頭をぶつけてもがまんして、家へ帰ってきたら文字がぐらついてこわかった僕。クッキーを焼いている僕。写真のようにはっきりあらわれる。時には助けたいと思うが、手をのばしてもさわれない。数えきれないほど僕が出てきた。そしてマンションをもう一度見ると、中野という表札はない。さがしてみよう。
今度は立川市にあった。また僕が出てきた。犬をもらって感激している僕。磯野君に初めて会った僕。…学校を見た。僕が文章を書いている。
パタン。壷のふたをとじた。先生は二つのものが入っていると言った。僕は思った。壷の中には、自分の苦しい思い出と楽しい思い出が入っているのだと。
楽しい時をすごせた。

壷がイメージの世界の内外を意識させるものであるという観点から見るならば、これはイメージ世界に入ってしばし遊んできたということである。素直につぼにはまったということか、その誘導に従えば壷の内でこれだけの逍遥ができるということである。時間性が強い点が特徴といえるが、先の資料5と6を考えあわせると、五年生ともなると、時間、空間、人間を意識してこの人間世界を見るようになるということが言えよう。

（資料8）つぼ　T・T
一年生・男子・平成七年度

へやにつぼがおいてあります。にわで男の子がサッカーをやっています。男の子がシュートしたときに、ボールがカーブして、へやのつぼをわってしまいました。お母さんがへやを見たら、つぼがわれていたので、びっくりしました。
男の子は、物置の中にかくれていました。お母さんが、さがして、さがして、やっと見つかりました。男の子はすごくおこられて、やっと「ごめんなさい」といいました。お母さんがつぼのかけらをあつめました。「お父さんが帰ってきたらおこられるわよ！」と言いました。男の子はねてしまって、ゆうごはんを食べないで、朝までねてしまいました。おきると、お父さんがおきていて、「なんでつぼをわったの？」と聞きました。男の子は「サッカーをやっていて、シュートしたら、カーブして、わった」としょうじきに言いました。男の子はゆるしてもらいました。
お父さんは、ボンドで、つぼを、くっつけました。「こんどから気をつけてシュートするんだよ。」と、お父さんが言いました。「はい。」と男の子が言いました。次の日、まどをあけっぱなしにして、サッカーをやったので、またつぼをわってしまいました。こんどはあまりおこられませんでしたが、男の子は、家出をしてしまいました。たべものなどは、ちゃんともっていきました。お金は、たくさんもっていたので、しんかんせんのきっぷをかって、もりおかまでいってホテルにとまって、あさはやくおきて、朝ごはんをちょっと食べて、ホテルを出ました。出てから、ちずを見て、「あっ」男の子はさけんで、ここにともだちがいることを思い出しました。そこでともだちのいるところへむかいました。しばらく歩いて、やっとつきました。ピンポーンと、ベルをならしました。「はあい。」とへんじがしました。ドアをあけたら、ともだちのお母さんが出てきました。「ここの家の子にしてください。」と男の子が言いました。そうしたら、「いいよ」といわれて、その家の子になりました。
（後略）

先の資料7では引越しということも時空転換の要因になっていたと言えよう。引越しはうち（内）がうち（内）でなくなることである。新しく内と外の設定をやり直さなくてはならない。子どもたちには、後々まで、その後遺症を引きずることも多い。その裏付けになるのがこの資料8である。壷が壊れてしまった。それは宇宙が壊れたことを意味する。ほかの宇宙に移らなければならない。それ故にこの子は家出をしてしまった、そのように理解すべきものと思う。大事な壷を割ってしまった、その罪の意識から家出をしたと見ることも可能かもしれないが、一回目は隠れていた男の子は、見つけた母親にすごく叱られた。二度目は、余り叱られなかったけれど家出をしてしまった。この辺り、壷を割ってしまったことの常識的判断と、壷が割れたことによる、イマジネーションの誘導との間で、揺れを見せているように思える。

（資料9）地球のつぼ　H・S
四年生・男子・平成六年度

うすぐらい部屋の中。すみっこに小さなつぼがある。
前からあったがまだ中身を調べた事はない。今日こそはとおそるおそるのぞいてみた。中にはきらきら光る不思議な水が入っていた。
どれくらいのぞいていただろう。気がつくと広い野原に立っていた。なにがおきたのだろう。いったいここはどこだろう。

鳥の美しい声が聞こえる。空気もおいしい。木もあおあおとしげっている。少しはなれたところに小さな家がある。その家のまわりには白・赤・黄など色とりどりの花がならんでいる。

ここは、昔の大自然の中らしい。山の向こうから灰色のけむりが向かってくる。けむりの通った後は、木も花もかれはてている。

あっという間に、僕はけむりに包まれた。そのけむりをすいこんだとたんに苦しくなった。

「助けてくれ」

でも、そのけむりは広がるばかりでいっこうにへらない。

僕はたおれてしまった。鳥の鳴き声はもう聞こえない。

気がついた時はつぼの前でたおれていた。

そのつぼの中の光る水もなくなりその後ずうっと出てこない。

そのつぼは僕にとってもいい事を教えてくれたんだ。

もしかしたらその水は地球からのメッセージだったのかもしれない。

みんながそのつぼを持っていれば、今こんな地球じゃなかったのに。

「地球のつぼ」という題目に注目させられた。身体のつぼが、身体の健康、調子に深く関わるように、地球環境の末期症状を救うその警告を発するつぼを比喩として考えたか。あるいは、つぼと壷の同音であるところから働いた連想か。しかし、子どもであるからこそ壷とつぼの同義性に気づいているのだとも考えられる。壷と身体と宇宙、この三者のイメージがそれぞれ転換可能であり、その境界がイマジネーションによって消滅してしまうことに気づいているのだと考えたい。

（資料10）水をたたえた緑のつぼ　E・K

五年生・男子・平成六年度

緑の大きなつぼがあった。僕はつぼの中をのぞいてみた。その中には水がいっぱい入っていた。水の中にはたくさんの魚や生きものがいた。その中にいつの間にか僕もいたのだ。

水の中ほどに島があった。島とはいっても、大陸といっていい程の大きな島だった。その島がいくつかに分れて三つの国になった。それらの国は、川が流れ湖は水をたたえ、たくさんの山があり緑でおおわれていた。たくさんの村ができ、町も出来て、たくさんの人が住んでいた。この国のひとつはとても豊かで、工業も発達していた。二つ目は農業が主の国だ。みんなで力を合わせて農業を営んでいたが、工場もあるそう貧しくない国だった。

やがて島全体の国々が二つに分かれて争いを始めた。しかもそういう大きな戦いが二度もあったのだ。そしてその対立の中で、核兵器にも目を向けた。このたくさんの国を何回もめちゃくちゃに出来る兵器が作られ、ある国でついに使われてしまったのだ。この兵器はずっと後にも三つ目の国を舞台にして、使われそうになった時もあった。その大きな戦いの後に、一つ目の国と二つ目の国に考えの違いがはっきり生じた。そうして、小さな争いはなくならず、その戦場となる場所は必ず貧しい三つ目の国だった。それらの国民達が血を流しあっているのだ。

そういう争いも今、終わりを告げようとしているかに見える。二つ目の国も一つ目の国と同じ考えを持つようになったのだ。しかし全世界が平和になったというのではない。なぜなら三つ目の国では争いがいまだに絶えないし、食料も少ないからだ。またこれらの島の環境もだんだん破壊されている。

この「つぼ」の中はこれからどうなるのだろう。僕の大切なつぼ。この美しいつぼ—地球。地球には他の星にはない大気があり、水と緑がたくさんある。またそこには生命がある。地球はそれらをあふれそうなほどいっぱい満たした巨大な「つぼ」なのだ。僕達はその「つぼ」をいつまでも水と緑で満たし、大切に割れないように守るべきだ。

壷の中をのぞくと中に水があるという例は多い。

地球全体を視野に入れる例は資料7や9にもあった。宇宙を視野に入れることが可能になる、天地を飲み込んでしまう。これが壷の定位置を占めるということの意味であるように思う。実際には宇宙のかなた何百キロ上空でなければ不可能な視点である。しかし、トランスフォーメーションのつぼが押えられれば、宇宙の一点に位置を取ることも可能となる。

（資料11）つぼ　Y・K

四年生・女子　平成六年度

私はある町にいました。魚屋、八百屋などなどいろいろな店が並んでいて、その中の一つに宝石屋がありました。突然私は、

「どろぼうだあ。だれかつかまえてつかまえてくれ。」

という声とともに走っていました。後ろからは宝石屋の主人と警察が追い掛けてきます。私はひっしで逃げました。その時、とつぜん前からもやもやと煙が出てきました。

ああなんだか気が遠くなるう。

気がつくと私はうすぐらい部屋にいました。部屋の中にはただ古い大きなつぼが一つ、ぽつんとおかれていました。ずいぶんとほこりがかかっています。

（いったいあのつぼの中には何が入っているのだろう。私はとても中をのぞきたくなりました。のぞくだけならいいだろう。）

そう自分にいいきかせてつぼに近づきました。しかしつぼにはまるで中をのぞいてはいけないとでもいうようにふたがしてあり、その上に重石の石がのせてありました。私はますますつぼの中が見たくなりました。

次の日の朝、私はぐうぜんそばを通りかかった人に何気なく話しかけてみました。

「あのつぼの中には何が入っているんですか。」

すると、その人は口止めでもされているかのようにおそるおそる話しはじめました。

「十年ぐらい前までは、あのつぼにはふたがなかったんですよ。それで、中をのぞく人が多かった多かった。あ、ほらあのつぼってあんなに大きいから目立つでしょ。だけどあのつぼの中をのぞいた人はなぜか消えてしまうそうだ。だから、二年前にこのふたをつけたのだ。」

というと、

「この話はだれにもするなよ。」

と言っていってしまいました。

私はこのつぼの中を見たくて見たくてしょうがなくなりました。

夜、私はだれもおきてないのを確認すると、そっと起きた。そして、つぼのほうにそっと行って、重石をどけようとしました。ガタリ、ゴト、

「だれだっ。」

私は素早く重石をのせベッドにもどりました。ピカリ、私のベッドに月の光が当たりました。

「なんだ風の音か。」

よし今度こそ。私はそっと重石をどかせるとふたを開けてなかに入った。ヒュードスン。あれ、ここは、

「あっ、昨日の町だ。」

「どろぼうだあ。だれか捕まえてくれえ。」

「わあぁぁ。」

ハッ　あれここは？私は、私の家の物置のつぼの上で寝ていたのでした。

クラインの壺といったらよいのであろう。巡り巡って、いつしかもとの場所に戻ってきた。あるいは、次から次へと新しい空間を移動していく例は多い。手放しして、身を任せていればいくらでも時空の転換が続いていくのが、子どもの究極の世界把握であるようだ。

（資料12）つぼ　　Y・Y

五年生・男子・平成六年度

今、うす暗い部屋の中につぼがあって窓から雷の光が当たっているとする。この時、つぼに近づこうとする。雷が鳴る。多くの人は怖くなって、つぼから離れるだろう。別の日、同じ部屋にやって来る人がいる。部屋には太陽の光がさし込んでいる。この時、怖いと思う人はいないだろう。同じつぼがあってもだ。

もし、つぼの中をのぞいたらどうだろう。部屋が明るければなんとも思わない。だが、部屋が暗かったらどうだろう。中にお化けがいるのではないか、などと不気味な空想が頭をよぎったりする。つぼの中は、周囲の状況によって変化する。しかし、それらはみな人間の頭の中で生れ、その場所に住み着く。その人間がいなくなれば家の中に入り、やって来れば表に出てくる。つぼの中は人間の空想が住み着く場所の一つである。そして、空想はあちこちに住んでいる。空想が住み着くのは、人間がその場所に残した空想を、別のときに同じ場所で思い出すからだ。もし、その空想を忘れていれば、空想は住み家を失う。また、周囲が変化すれば、その空想と同居し、正反対の空想ができる。そして入れ替わりに表へ出る。つまり、二つの顔を持っている。それらは、周囲と共に変化する。そのスイッチを操作するのは人間である。

空想は、人間が生み出し、そして人間が操る。人間はあちこちに、空想を残していく。そして、いつしかその空想を本当のことだと思い込んだりする。それが怪談になってたりする。でも思い込むのにも限度がある。人間は、ある程度以上のことはずっと空想として留めておく。が、ちらっと本当だと思ったりするかもしれない。

つぼの中には、未知の世界や人間の空想の世界が広がっている。人間にとって未開の場所は、未知の世界、空想の世界なのである。

人間とイマジネーションの関係を、ここまで解いて見せたのも壺の効能か。イマジネーションの誘導と共にある人間、個人を包み込む潜在意識世界の存在、子どもの直感は人間存在の基層が何であるかまでも捉えているようである。と、このように言うことが深読みに過ぎるなら、唯心論的人間理解がこの時期の子どもたちにはあるのだという確認だけは出来るように思う。

イメージ世界が、人間にとって未開の場所であるというこの世界把握のもう少し先に、宗教世界、超越者のいる世界があるように思う。

ここで取り上げた子どもたちの作文は、人間の基層である情動の世界がどう広がっているかを示している。上原先生は、ここに命の発露を認めたに違いない。

子どもの野性も神性も、イマジネーションの発動としてあるのだと考える。

（東京・聖徳学園小学校教諭）